

はじめに

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターのハンブルク・サブセンターは、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室の教員各位のご助力、とりわけローラント・シュナイダー教授の格別のご尽力によって、アジア・アフリカ研究所棟2階の1室に、平成14年11月に開設された。

以来、大阪市立大学大学院文学研究科の教員、同COE研究員があいついで訪問し、この施設の研究環境の整備を進めるとともに、これをフルに活用して研究に従事してきている。今後ともさらにさまざまな整備を進め、強力な共同研究の拠点として確立していく必要がある。

大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターと、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室とは、このサブセンターにおいて多彩な共同研究を推進することに合意しており、現にさまざまな共同研究が行われている。そうした中で、両者は、かねてからサブセンター開設記念の記念式典と共同研究会を開催することを模索し、相談を積み重ねてきた。

これらに関する話し合いをすすめる中で、日本側から研究者がハンブルク大学を訪れ、両大学の研究者による共同研究会・授業交流と、開設記念のレセプションを行うこと、今後推し進めるべき共同研究について意見交換を行うこと、ハンブルク大学の教員その他を日本に招聘し日本での共同研究に従事していただく件について最終的な打ち合わせを行うこと、などの骨格が定まった。

これにもとづき、2003年6月23日(月)より、大阪市立大学大学院文学研究科都市文

化研究センターの阪口弘之教授（国文学）、栄原永遠男教授（日本史学）、田畑雅英助教授（ドイツ言語文化学）、大学院後期博士課程在学の院生で COE 研究員である内藤由佳子氏（教育学）の4名がハンブルクを訪れた。また、金光桂子講師が、ロンドンからこれに合流した。

まず、6月24日（火）に授業交流を実施した。シュナイダー教授の古語文法の授業時間に、日本学専攻の学部学生を対象に、田畑助教授が「日本の学校におけるドイツ語教育について 日本の学生にとってのドイツ語習得の「難しさ」 」と題して、約30分ほどの講義を行なった。

これは、主として日本の大学におけるドイツ語教育の現状を解説し、日本の学生がドイツ語を学習する際に難しいと感じる諸点について述べたものである。この講義はドイツ語で行なわれたが、段落ごとに日本語による要約を挿入して、ドイツ人学生の理解の助けとした。出席の学生は約30名であった。

ついで6月25日（水）には、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学研究室の教員とともに、「大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター ハンブルク・サブセンター開設記念共同研究会」を、アジア・アフリカ研究所東翼棟109号室にて開催した。当日のプログラムは、以下の通りである。司会進行は金光講師がつとめた。

11:00 開会の辞 ローラント・シュナイダー

(Roland Schneider

ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所教授)

11:05 ~ 11:35 報告1 ローラント・シュナイダー

「ハンブルク大学の社会貢献」

(Der gesellschaftliche Beitrag der Universität Hamburg)

- 11:40 ~ 12:10 報告2 ミリアム・ローデ (Miriam Rohde 同助教授)
「日本における市民社会と政治参加」
(Städtische Zivilgesellschaft und politische Partizipation in Japan)
(以上、ドイツ語。通訳・内藤由佳子)
- 12:15 ~ 13:30 昼食休憩
- 13:30 ~ 14:00 報告3 栄原永遠男
「日本古代の宮都 紫香楽宮を中心に - 」
- 14:00 ~ 14:30 報告4 阪口弘之
「ドイツ 本との出会い」
- 14:30 ~ 14:50 休憩
- 14:50 ~ 15:20 報告5 田畑雅英
「日本の音楽劇に見る『都』と『鄙』・『都市』と『田舎』」
(以上、日本語)
- 15:25 閉会の辞 阪口弘之
- 15:30 ~ 16:30 懇親会

全体は、ほぼ予定時間通りに順調に進行した。午前中は、ハンブルク大学の日本学関係の教員が参加され、午後にはそれに加えて、日本学の大学院生十数名も出席した。各報告に熱心に耳を傾ける姿が見られ、討論も行われた。共同研究会の後に同じ部屋で行なわれた開設記念レセプションでは、大学院生も交えて歓談が行なわれ、今回の共同研究会は成功裡に幕を閉じた。

6月27日(木)の午後には、日本学科も含むアジア・アフリカ研究所の新棟落成1周年を記念する祭典 Asien-Afrika Boulevard が開かれた。これには、栄原教授、田畑助教

授、内藤氏の3名が出席した。

アジア・アフリカ関係の音楽・劇などのさまざまなパフォーマンス、エスニック料理の並ぶ模擬店、古書市、各種展示など、盛りだくさんな内容で、教員・学生たちの参加も多く、みな楽しんでいた。とりわけ日本学の山守雄講師の主宰で行われた、日本学の大学院生たちによる書の展示は、見事な作品ぞろいで、非常に感銘深かった。

一方、これと平行して、6月26日(水)・27日(木)の両日、阪口教授と金光講師がフランクフルトに赴き、同地のフランクフルト市立工芸博物館フォーレッチ・コレクションの資料調査を行なった。この調査では、新資料の発見も含め、きわめて重要な成果を収めることができた。今後の日本とドイツの共同研究の展望が大きく開けた意義深い資料調査であった。

また、ハンブルク大学の教員その他を日本に招聘するための打ち合わせも行なった。その結果、日本学研究室のユードイット・アロカイ (Judith Arokay) 助教授を、COE 招聘研究者として、9月半ばから約3週間の日程で、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターに招く計画を進めることで最終的に合意した。

アロカイ助教授には、本年9月30日・10月1日に開催が予定されているCOE国際シンポジウム「都市とフィクション」にも、パネリストとして参加していただくことになり、これらの件について、アロカイ助教授と綿密に打ち合わせを行なった。

また、ハンブルク大学日本学研究室所属のエヴァ・カミンスキー=クレチャック (Eva Kaminski-Kleciak) 氏についても、9月から4ヶ月間の予定で、COE 研究員として大阪市立大学で研究に従事することで合意した。

アロカイ助教授とカミンスキー=クレチャック氏には、9月下旬に開かれる大阪市立大学大学院文学研究科のインターナショナル・スクールにも協力していただく予定であり、この点についても相談を行なった。

さらに、今後のハンブルク・サブセンターの運営の仕方、サブセンターを拠点とする共同

研究の進め方、サブセンターとハンブルク大学日本学科との関係などについて、随時意見交換を行なった。

本報告書は、以上の多彩な成果のうち、6月24日の授業交流と、6月25日の共同研究会の内容を収録したものである。いずれの論文も、上述の報告をもとにして、加筆を行っている。また、参考資料や図版等を追加したものもある。 (栄原永遠男)